

私の親友

豊川中部中・2 安井 杏

ピアノを始めたきっかけは引越したかった。たまたまピアノ教室の隣に引越した私は楽しそうだなという興味で始めた。最初は緊張してうまく話せなかったし、歌も歌えなかった。でもピアノを弾いて自分の手で音を出すのがとても楽しく、疲れが一気に吹き飛ぶようになった。毎週火曜日、軽い足どりでピアノ教室へ向かう。そしてピアノに触れる。私にとってそれは毎週のこぼれびのようだった。

しばらくして、私の家にピアノが届いた。電子ピアノだがそのピアノはまるでグランドピアノを弾いているかのような音色で私の心をつかむ。夢のようだった。自分の家で自分の好きな曲を弾くことができる。毎日学校から帰ってきて宿題をしてからピアノの前へと向かう。片手ずつ指を慣らしていき、両手で合わせる。片手だけだとやはり物足りない気がするが両手で弾いていると、自分の手が誰かに乗っ取られたかのようにすらと動き始める。それが私はとても楽しくて仕方がなかった。色々な曲を弾きこなしていくうちに私は少しずつ上達していった。小学校二年生のとき、私は学習発表会のピアノの伴奏オーディションで見事選ばれた。それからずっと小学校六年生まで毎年のように伴奏をやってきた私はピアノのスキルも含め、いろいろなことが成長したと思う。いろいろな子からピアノが上手と言われていた私はとても輝いていた。中学生になるまでは。

中学一年生。二学期。私にとってとても大事なイベント。合唱コンクール。私は学校のピアノを弾けることがとても楽しみですごくわくわくしていた。でも小学生の時のようにそう簡単にはいかなかった。私の他にもう一人、ライバルがいた。その人の実力を知らない

私は不安におそわれた。その不安は感じたことのない不思議なものだった。ある日、私は体調不良で病院へ行った。すると医師は「ストレスが原因かもしれない。」

私はそれを聞いてストレスがどこからきているのか即座にわかった。オーディション。それしかなかった。私はオーディションを受けるのをやめた。それは自分が負けを認めたような気がしてすごく悔しかった。それから私は家でピアノを弾く日が一気に減った。私にとってピアノは何のためにあるのか。今の私に足りないものは何なのか。もちろんただだけ考えても自分の中で納得する答えは出なかった。いつしか私にとってピアノは「嫌いなもの」になっていった。

そんな悶々とする毎日の中で私はピアニストの清塚信也さんのコンサートに行く機会があった。母親が応募したコンサートチケットが当たったのだ。清塚信也さんは力強いピアノのタッチと優雅な音色で、聴いている人の心をわし掴みにしてしまうとても有名な人だ。しかし、ピアノが「嫌いなもの」になっていた私は楽しみでありながらもどこか不安を抱えていた。「今、自分がどれだけ上手で感動するピアノを聴いたとしても心の中で動くものはあるのだろうか。」

私は指定された席へ着いた。いよいよコンサートが始まる。ステージに登場した清塚さんは堂々と胸を張り、深々とおじきをしてピアノの前の椅子へ、腰掛ける。最初の一言。それは私の想像していたものをはるかに超えていた。会場全体に響き渡る力強くかつ繊細な音色。自分の体が音楽に引きこまれていくような初めての感覚だった。ピアノを弾いている清塚さんの表情は生き生きとしていて心の底からピアノを愛しているように見えた。その時私は自分にとってピアノは何のためにあるのかということの答えが少しわかったような気がした。

ピアノ教室の日、昔とは違う重い足どりで歩いていく。でもこの日、私にとってとても大きく心が動く日となったのだ。いつものよ

うに先生にあいさつをして、ピアノの前の椅子に座る。すると先生が

「杏ちゃん、次の発表会なんだけどき、何か弾きたい曲はあるかな。」
私は発表会に出るのはもう十回目で慣れっこだ。でも弾きたい曲と言われてぴんとくるものはなかった。沈黙の空気がひたすら続く。すると先生は

「先生はクラシックとかでもいいと思うんだけど、大事なものはどれだけにうまく弾けるかじゃなくて、どれだけ杏ちゃんが楽しく苦にならずに弾けるかだからね。」

私は先生の言葉にぐっと背中を押されたような気がした。曲の完成度だけにこだわっていた私は一番大事なものを見失っていた。自分がピアノを弾いていて楽しいと思える気持ち。それが一番大事なんだと気がついた私は小学生のときのように再びピアノに向き合ったのだ。

ピアノの発表会、当日。いつもの発表会とは全く違う気持ちだった。失敗したらどうしようという気持ちより、自分がどれだけあの舞台で輝けるか、どれだけ自分のピアノを聴いた人に感動を与えられるか。私がこれまで練習してきた「宿命」。最初からアタックがとて強い曲だ。だからこそ最初で失敗したら聴いている人の心を掴めない。しばらくしたらもう自分の出番の四番前の人が演奏していた。私は舞台裏へ向かう。自分の番になると私の心に不安はなかった。ただ楽しみたい。あの舞台で輝きたい、という気持ちしかなかった。深々とおじぎをして、ピアノの前の椅子に座り大きく深呼吸をする。私が引き始めたとたん会場は私が生み出す音色だけが響き渡った。弾いている私に緊張というものは全くなかった。ただただ楽しい。改めてピアノが私にとってどんな存在なのかがわかった。曲を弾き終え、また客席の方へおじぎをすると会場は拍手の音に包まれた。やりきった。しばらく鳴りやまなかった拍手は私の心を救ったのだ。

私にとってピアノは人生の中でとてもかけがえのないものだと思う。時には嫌いになってしまふときもこれから何度もあるだろう。それでも私は絶対に諦めない。なぜなら、私にとって音楽はなくてはならないもの、そして私にとってピアノは永遠の親友なのだから。